

平成27年1月29日

事業経過報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

都道府県教育委員会等名 国立大学法人京都教育大学
 所 在 地 京都府京都市伏見区深草藤森町1
 代 表 者 職 氏 名 学長 位藤 紀美子

平成26年度英語教育強化地域拠点事業における事業経過報告書を提出します。

1. 事業の実施期間

委託を受けた日 ～ 平成27年3月31日

2. 強化地域拠点の学校名 (学校数が多い場合は欄を追加すること)

ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくこうとうがっこう	ふりがな	やました ひろぶみ
学校名	国立大学法人京都教育大学附属高等学校 〒612-8431 京都府京都市伏見区深草越後屋敷町111	校長名	山下 宏文
ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくももやまちゅうがっこう	ふりがな	さかきばら よしひろ
学校名	国立大学法人京都教育大学附属桃山中学校 〒612-0071 京都府京都市伏見区桃山井伊掃部東町16	校長名	榊原 禎宏
ふりがな	こくりつだいがくほうじんきょうときょういくだいがくふぞくもましようがっこう	ふりがな	あさい かずゆき
学校名	国立大学法人京都教育大学附属桃山小学校 〒612-0072 京都府京都市伏見区桃山筒井伊賀東町46	校長名	浅井 和行

※ 本学には、小中一貫教育を行う教育課程特例校指定を受けた附属京都小中学校があり、今回の研究に関して研究校指定の申請はしませんが、附属桃山小学校、附属桃山中学校との比較対象としてデータの検証等において学内的に研究協力(学内研究協力校)を行います。

3. 研究内容

(1) 研究開発課題

グローバル化に対応し、小学校から高等学校まで系統的な英語カリキュラムを開発し、海外に通用する英語表現力並びに英語コミュニケーション能力を育成する。

(2) 研究の概要

1. 小学校1年生から小学校4年生までは、英語活動型とし、英語に慣れる、体感するカリキュラムを作成し、コミュニケーション能力の素地を養う。
2. 小学5年生から中学校英語につながる英語科(教科)とし、話す・聞く・読む・書く活動を取り入れたカリキュラムを作成する。
3. 中学2年生からは高等学校英語につながるカリキュラムを開発すると共に、世界に通用する英語コミュニケーション能力の育成を図るために海外との交流プログラムを開発する。

4. 各段階における英語検定等において英語能力の測定を行う。

(3) 現状の分析と仮説等

①現状の分析と研究の目的

グローバル化の進展によって、我が国を含む世界はめまぐるしい速さで変化を遂げており、我が国においてもグローバル化に対応した教育のあり方を考え直すことが急務である。京都教育大学ではそのような社会情勢に対応し「グローバル人材育成プログラム」の開発に着手する。

グローバル人材育成プログラムにおいては、英語力の強化、英語コミュニケーション能力の強化は欠かせない。そこで、本事業では、附属学校園として幼稚園から高等学校までの全ての校種を擁する教員養成大学である京都教育大学の特色を生かし、大学と附属学校園が一体となって、小学校・中学校・高等学校が一貫した「英語強化カリキュラム」を開発するものとする。

②研究仮説

小・中・高一貫カリキュラムを作成し、小学校・中学校・高等学校において身体的・情動的に活性化する指導を通して自己表現力やコミュニケーション能力を育成することで、海外に羽ばたく人材の育成につながる。

③研究成果の評価方法

- ・児童・生徒の興味・関心等の学習状況の変容について定量的に把握できる評価法について検討し、実施する。
- ・外部団体（教育委員会）等からの評価を受け、改善する。

(4) 研究開発型

	開始学年及び週当たり授業時数コマ			
	第一年次	第二年次	第三年次	第四年次
①小学校 外国語活動型	第 3 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ	第 1 学年 1 コマ
②小学校 教科型	第 5 学年 1 コマ	第 5 学年 2 コマ	第 5 学年 2 コマ	第 5 学年 2 コマ

(5) 研究計画（平成26年度の進捗状況・課題）

○第一年次～第四年次、校種別

第一年次

【全体】

- ・大学教員を中心に小中高一貫カリキュラムの作成、指導内容、指導方法について、研修会の充実を図る。
- ・各校種の指導内容について共通理解し、英語教育における目指す生徒像を確認する。
- ・各校種において研究授業を開催し、研究会において教材観・生徒観・指導観を中心に意見交流を図り、生徒の実体把握に努める。

【小学校】

- ・京都小中学校の小中一貫英語カリキュラムを全校種（小・中・高）担当で検証する。
- ・桃山小学校1年生から4年生においては、「Hi, friends!」を実施すると共に今までで行っている英語活動を授業参観やカリキュラム検討を通して検証する。
- ・桃山小学校・京都小学校の5年生・6年生では（英語）教科として、身体と情動を動かす体験を積ませる指導を行うとともに中学1年生の指導内容をオーラルで導入し、スムーズに中学校英語に移行させる。

【中学校】

- ・小学校英語を経験している生徒に対して、中学校英語では、何からどのように学習を進めるべきかを全校種（小・中・高）担当で検討し、系統的なカリキュラムに着手する。
- ・中学校英語教員が5・6年生の英語授業を担当し、5・6年生の英語授業にTTとして参加できる体制を作る。

【高校】

- ・小中英語カリキュラムの検証・検討に携わる。
- ・中学校英語から高等学校英語にスムーズに移行していける中高一貫カリキュラムを検討する。
- ・小学校、中学校の英語授業を参観し、到達目標設定に関して高校、大学を見通し、検証する。

○平成26年度の進捗状況・課題

【全体】

- ・平成26年度においては、小中高一貫のカリキュラム作成を行うに当たり、まず現時点における互いの校種間の英語学習の内容や指導の重点などの共通理解を図ることを中心に議論を進めてきた。また、現時点における各校種の成果及び課題について、担当大学教員からの助言を受け、平成27年度以降の指導内容及び指導方法についての検討を行った。
- ・月1回の担当者会議を実施し、各校種での取組概要や、学習到達目標等の作成・検討を行った。
- ・各校種において実施している研究発表会に参加し、教材観・児童生徒観・指導観及び指導の重点について共通理解を図ると共に、参会者からの意見をふまえ、担当者会議において英語教科化と小中高一貫の英語教育のあり方について、研究の方向性について議論を行った。
- ・各校種において先進校の研究発表会等に参加し、情報の交流を図ると共に、担当者会議において視察内容の共有を図った。
- 各校種の授業について公開授業・事後研究会を通して情報交流を図ることに重点を置いたため、一貫したカリキュラムについての話し合いが不十分である。今年度については、各校種における学習到達目標等の作成が進んでいるため、平成27年度以降については、それらをふまえた授業実践を行いながら、カリキュラムの作成にあたる必要がある。
- 中・高においては、進学段階で外部からの新入生の受け入れを行っているため、小学校で英語教科化の教育課程を受けていない生徒も入学することとなり、それら生徒についての支援方法についてさらに検討を加える必要がある。
- 平成26年度については各校種でそれぞれが研究発表会を行い、担当者が参加するという形態をとっている。平成27年度以降については、今年度の基礎研究を踏まえた授業実践を公開する研究発表会を小・中・高で同時に開催し、広く一般の参会者から意見を求め、カリキュラムや授業内容の質の向上を目指す必要がある。

【小学校】

- ・年度当初に第3学年以上の児童を対象に児童英検(GOLD)を実施した。
- ・小学校外国語の教科化に当たり、現行中学校学習指導要領を踏まえた独自の「教科目標」及び「評価の観点及びその趣旨」を作成した。
- ・設定した「評価の観点及びその趣旨」を基に、現行実施している「外国語活動カリキュラム」を見直し、指導項目及び指導内容について検討した。
- ・各教科書会社の出版する中学校検定教科書を精査し、中学校における指導事項及び指導内容の理解を深めた。また、それを踏まえ、平成27年度以降のカリキュラムに活用するための言語材料・文法事項等の検討を行った。
- ・評価の観点を踏まえた、各学年の「学習到達目標」及びその評価方法案を作成すると共に、2学年ごとのまとまりで、「学習すべき文法項目」の案を作成した。
- ・公開授業を定期的に行い、小学校教員内で「外国語活動」「外国語」のあり方について議論を交わし、児童の実態や発達段階を踏まえた活動案について整理を行った。
- ・「書く」「読む」ことを目指した活動を試行し、児童の反応を見ると共に、アルファベット等の指導を中心に各学年で同様の実践を行い、「書く」「読む」の導入学年や導入方法の検討を行った。
- 授業数の変更が平成27年度以降であるため、今年度検討したカリキュラムが十分に実施できていない。そのため、平成27年度以降について、カリキュラムを試行すると共に精査する作業を同時並行で行う必要がある。
- 児童英検等外部試験を平成27年度以降も継続して実施し、児童の英語力に関する変容を追っていく必要がある。
- 全学年で一斉にカリキュラムを変更するため、特に高学年「外国語」において、第1学年から学習の積み上げを前提として作成しているカリキュラムと、児童が慣れ親しんでいる英語表現や英語理解の度合いが違っている。そのため、カリキュラムを試行しながらも、未履修分の学習内容について何らかの支援を行っていく必要がある。

[外国語活動開始時期及び授業数の変更について]

附属桃山小学校では現在、第3学年からの週1回の本格的な英語活動に至るまでに、低学年期において歌やゲームなどを通して英語に触れる時間を月2回程度実施している。当事業計画においては、平成27年度より第3学年以降に週2時間の英語活動を実施することを計画している。会議を重ねる中で、英語活動の時間について、低学年期の月2回から第3学年の週2回へ急増することによって児童の負担が大きくなることが予想されるのではないかという意見が出た。また、先行研究等を読み進める中で、特にフォニックス指導などの英語音声学習においては、より低年齢からの慣れ親しみを行うことが望ましいと判断した。そのため、平成27年度以降においては、第1・2学年の授業時数を月2回から週1回に増加させ、第1学年より外国語活動をカリキュラムの中に位置づけるように変更した。

【中学校】

- ・有効な小中接続、中高接続及び中学校英語教育の高度化を意識した今年度版のカリキュラム作成を行い、CAN・DO リストについても完成させた。
- ・小学校外国語活動を経験してきた中学1年生に対する有効な小中接続を意識した授業となるように、毎時間、オリジナルの視覚教材やチャンツを豊富に活用し、意味理解を伴った音声重視

のインプットを大量に与え、生徒たちが楽しんで取り組める指導を行った。

- ・中学校 2 年生，3 年生の授業においては，Total Physical Response（以下 TPR）による新出文型導入やラウンド制の活用，大量の Q&A 活動を行うことで，意味理解を伴った音声重視のインプット及び多様なアウトプット活動を効果的に行うことで，英語教育の高度化を目指した。
- ・小中高の教員の連携を行いつつ，中学校英語教育の高度化を目指す授業を行っていきけるよう，中学校各教員の研修・研究のみならず，教員間の研修・協議も重ねた。
- ・意味理解を重視したインプット中心の授業に加え，音読重視，ペアワーク，グループワークを毎時間行い，協働活動及び多様なアウトプット活動を効果的に行う授業となるよう，工夫を行った。
- ・全学年ともほぼ all English の授業を行った。
- ・中学校 1 年生の担当教員が生徒と共に，小学校に出向き，小中接続を意識した交流授業を 3 回行い，本年 2 月の研究発表会でも研究授業を行う。
- ・近畿圏内の国立大学附属中学校・高等学校英語部会における提案授業として，4 技能の統合と活発なアウトプット活動を行う中学校 3 年生対象の授業を本校で行い，研究協議を行った。また本学英語教育専攻の教授の講演を受けての研修も行った。
- ・本学教職大学院生の研究・研修として，中学校 1 年生を対象とした，音声重視の研究授業も行い
研修を深めた。
- ・小中高連携に関わる先進校への視察も行い，研修を深めた。（「立命館中学・高等学校，京都光華中学・高等学校」）
- ・JTE 同志のティームティーチングを毎週 1 時間行うことで，個に応じた指導も丁寧に行えるよう工夫した。
- ・ALT とのティームティーチングについても，その授業内容の向上に工夫を重ねた。
- ・4 技能の統合及び英語教育の高度化を目指した指導方法の研修やワークシート作成や活用も丁寧に行えるよう努めた。
- ・高等学校 1 年生段階で学習する文法事項の一部を中学校で指導する計画に関わって，中高の教員で連携を始めることができた。
- ・2014 年度京都外国語大学大学院公開講座にて，小中高接続を意識した中学校における英語授業の実践及び英語教育の高度化についての報告を行った。
- ・実用英語技能検定取得に向けて，本校を準会場として年 3 回実施し，リスニング対策講座及び面接対策講座を毎回行った。
- ・3 学期中に中学 1 年生対象に英検の「英語能力判定テスト」を実施する。
- 英語教育の高度化に向けて，CAN-DO リストの内容について，検討を続けていく必要がある。
- 本校に在学する帰国生徒たちの高度な英語力維持に向けての指導についても，工夫を続ける必要がある。
- 附属桃山小学校からの入学生と中学校受験を経ての外部生が入学してくるため，両者に有効な指導をさらに検討していく必要がある。
- 本学が研究指定を受けている「グローバル人材育成プログラムの開発」に関わる研究と，本研究指定との効果的な連携を意識しながら，研究を進めていく必要がある。

【高等学校】

- ・ 中学校3年生と高等学校1年生の英語力のギャップを埋めるために、3回の入学前課題を設定した。
- ・ 中学校と高等学校の英語学習をスムーズにつなぐための連携カリキュラムの検討に着手した。
- ・ Skype を使ったオーストラリアの高等学校との交流授業の可能性を検討した。
- ・ オーストラリアの高等学校が研修旅行で来日した際、2校の先生がたとお会いし、今後の交流に関する可能性を話し合った。
- ・ 本校独自の実践研究会にて、英語教育の高度化をテーマにした英語科公開授業を実施した。
- ・ 中高連携を行っている先進校の研究会に参加し、研修を深めた。
- ・ 小中高接続を意識した CAN-DO リストの作成に着手した。
- CAN-DO リストに関しては更に改善していく必要がある。

第二年次

【小学校】

- ・ 小学校1年生から4年生の英語活動において「Hi, friends!」以外に「聞くこと」及び「話すこと」を中心とした活動を通して言語や文化について理解が深まる教材を開発する。
- ・ ALT との指導方法に関する研究会を持ち、指導内容を確認する。
- ・ JET プログラムによる ALT の活用を図る。
- ・ 第1学年から週1回の授業時数を確保することを目指し、教育課程の変更を行った。そのため、学校全体においてモジュールの時間を確保するのではなく、小学校における基本単位である45分間での学習のあり方を工夫・検討し、児童の英語力伸長を図ることを目指すこととした。

【中学校】

- ・ 英語教育における小中ギャップが生じないような経験をした中学生に対して、身体と情緒を活性化する指導を行うとともに、英語の授業は、ほぼ英語で実施する。
- ・ 外国人と1対1で会話できる場を増やし、英語コミュニケーション能力の獲得に努める。
- ・ また、スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングのバランスを考え、4技能を総合的に学習し、英語表現能力の育成に努める。
- ・ 中学校英語教育の高度化に向けて、4技能を統合的に向上させる、より効果的な授業を行うことができるよう、さらなる研修・研究を進めていく。
- ・ 本校に在学する高度な英語力を持つ帰国生徒が、その英語力を維持していくための指導方法を検討し、さらには、帰国生徒が他の生徒の英語力の向上にも貢献できるよう、工夫を進めていく。
- ・ 第一年次に作成した年間計画及び CAN-DO リストの内容が、さらに充実したものとなるように検討を進めていく。
- ・ 4技能の向上に向けてのより効果的な指導を目指すために、生徒たちの英語に対する意識調査や英語力に関わるデータを蓄積していく。
- ・ 英語教育の高度化に向けて、TPR 及びラウンド制の効果的な活用をさらに実践し、研究を進める。
- ・ 本学が研究指定を受けている「グローバル人材育成プログラムの開発」に関わる研究と、本研

究指定との効果的な連携を意識しながら、さらなる研究を進めていく。

【高等学校】

- ・小中英語カリキュラムと高校英語カリキュラムをつなぎ、校種の移行がスムーズに行えるカリキュラムを開発する。
- ・高等学校カリキュラムでは、自分の考えや意見が英語で主張できるような場面を設け、既存の教科書学習から発展的な学習に取り組みグローバル人材育成につなげる。
- ・発展的な学習に取り組みさせるために、2年生文系生徒に対して週1単位の選択授業を設定する。

第三年次

【全校種】

- ・引き続き小・中・高を一貫した英語カリキュラムの実践に努める。また、それぞれの校種で出てきた課題について検討し、改善を図る。
- ・引き続き、各校種において発展的な学習に取り組み、各段階において一定の語彙力の獲得に努める。
- ・海外との交流を通して、英語コミュニケーション能力を発揮できる場面を設定する中で、生きた英語力につながっているか検証する。
- ・3年経過した生徒に対してアンケート等により調査し、成果を確認する。

第四年次

【全校種】

- ・小学校教員対象の英語研修会を総括し、より需要に応えるかたちの研修会を開発する。
- ・小学校英語を経験した中学生・高校生の成果と課題を明確にし、身体と情動を活性化する指導を継続して研究する。
- ・すべての校種において英語研究会を実施し、全体の理解にもとづき、効果的な英語教育のあり方を追求する。

(6) 評価計画 (平成26年度の進捗状況・課題)

○第一年次～第四年次、校種別

第一年次

- ・児童・生徒の興味・関心等の学習状況の変容について定量的に把握できる評価法について検討する。
- ・それぞれの校種において実施する研究授業における研究会の記録から、各学年における生徒の実態把握並びに英語力を測定する。
- ・小学校で英語活動・英語科を経て中学校英語を経験した中学2年生において英語検定を受検し成果を検証する。

○平成26年度の進捗状況・課題

【全体】

- ・各校種における内部評価の方法及び外部評価の方法について、定例の担当者会議の中で共通理解を図ると共に、5月に行われた文部科学省の説明会の内容を共有し、さまざまな外部試験の内容について精査し、追跡調査として実施可能な外部評価の方法について議論した。

- 英語高度化の実践について、その成果を小学校から高等学校まで一括して図るための外部指標がなく、各校種で別々の外部テスト等を行わざるを得ない状態となっている。特に小学校から中学校への英語力の変化を見取るための適切な方法についてさらに模索をすると共に、現在行っている外部評価（児童英検等）を継続し、その経年変化を見取っていく必要がある。

【小学校】

- ・第3学年以上の児童に対し、授業後の自己評価カード記入の時間を設け、児童の授業への参加態度や授業への反応に関するデータの蓄積を行った。
- ・年度当初に「情意に関するアンケート」を第3学年以上で実施し、データの集約を行った。来年度以降も同様のアンケートを実施し、変容を追跡する予定である。
- 児童英検において調査ができない「スピーキング」の調査方法について、追加の外部試験を実施するのか等検証方法が見いだせていない。
- 「教科化」にあたり、現在の「活動に関する文言評価」から数値評価にするのか、あるいは、その際にテスト等をどのように実施するのかについて十分な議論ができていない。そのため、各学年でどのような評価方法が望ましいのかについて、平成27年度の実践をふまえて検討していく必要がある。

【中学校】

- ・年間計画の中の観点別評価との関連性・一貫性を意識しての CAN-DO リスト作成を行うことができた。
 - ・中学校1年生を対象に3学期に英検の「英語能力判定テスト」を実施することで、小学校での英語の「教科化」がどのような影響があるかを追跡・研究する計画である。
 - ・授業内容・指導方法が評価と一体化したものになるように、工夫・研修を行った。
 - ・学年末に英語学習に関する意識調査を、各学年とも行う計画である。
 - ・様々な場面・方法で、評価が行えるよう、工夫した。
 - ・豊富なアウトプット活動を行ない、その成果が出るよう、各学年とも多様なプレゼンテーション活動を行ない、様々な形態の音読テスト・暗唱テスト・スピーキングテストが実施できるよう工夫を行った。
 - 授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう、今後も検討・研修が必要である。
 - 英語教育の高度化に向けて、中身の濃い、実現性の高い CAN-DO リストとなるよう、今後、さらなる検討が必要である。
 - 英語学習に対する情意面の意識調査の内容をさらに検討・改善していく必要がある。
 - 定期テストの作成に関わり、評価と一体化したテストづくりとなるよう、一層の研修が必要である。
 - スピーキングテストの方法等のアウトプットの力を測る評価方法について、さらに研修研究を深める必要がある。
- #### 【高等学校】
- ・CAN-DO リストの作成とともに、定期テスト等での評価以外にも、活動に適した評価方法についての検討を始めた。

第二年次・第三年次

【小学校】

〈スピーキング〉歌，チャンツ，対話などの活動の様子を観察し，文章で評価する。

〈リスニング〉5・6年生については，児童英検 SILVER 等を全員に実施する。

〈リーディング〉5・6年生については，アルファベットや簡単な単語を読み取るペーパーテストを行う。6年生については，絵本など文字を助けて読む様子を観察する。

〈ライティング〉5年生ではアルファベットを書く，6年生では簡単な単語や文章を書くテストやワークシートを点数で評価する。

【中学校】

・ALT を活用しての様々な形態でのスピーキングテストを実施し，豊富な英文添削も行う。

・英語実用技能検定を年3回実施することを継続する。

・授業において高等学校で学ぶ発展的な問題を導入する。

・授業内容及び指導方法が評価と一体化したものとなるよう，さらなる検討・研修を行う。

・英語教育の高度化に向けて，中身の濃い，実現性の高い CAN-DO リストとなるよう，さらなる検討を行う。

・英語学習に対する情意面の意識調査の内容をさらに検討していく。

・定期テストの作成に関わり，指導方法及び評価と一体化したテストづくりとなるよう，一層，研修を深める。

・スピーキングテスト及び音読・暗唱テスト等のアウトプットの力を測る評価方法について，さらに研修・研究を深める。

【高等学校】

・自分の考えや主張を口頭でプレゼンテーションする場面や，意見や主張を論理的に文章化するエッセイ作成の試みを重視した英語力を測定する。

第四年次

【全体】

・英語教員にとって，特に小学校教員にとって有意義な研修会を定期的に持てたかを検証する。

・京都市の公立や他の附属においても本校同様の授業実践をおこない，今回の研究が，他校の英語担当者にとって有意義な発信となったかを検証する。

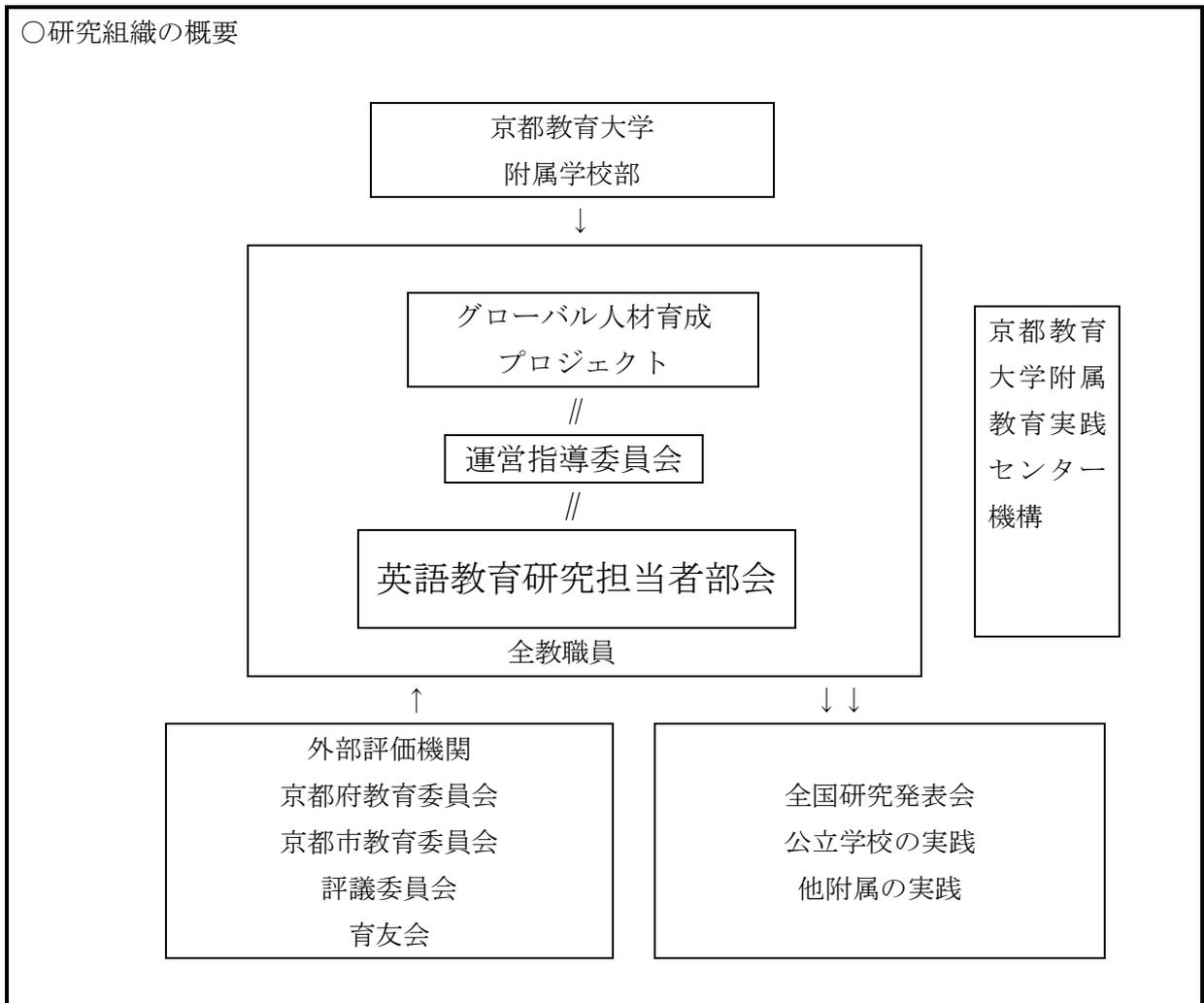
・研究授業や公開授業の指導内容や指導方法が他の学校でも実践できるスタンダードのモデルであったか，公立の先生方との懇談会で検証する。

・各学年においてスピーキング・リスニング・リーディング・ライティングのテストから生徒の英語表現力並びに英語コミュニケーション能力の成果と課題を検証する。

・海外との交流における生徒の活動から，英語力育成の成果と課題を検証する。

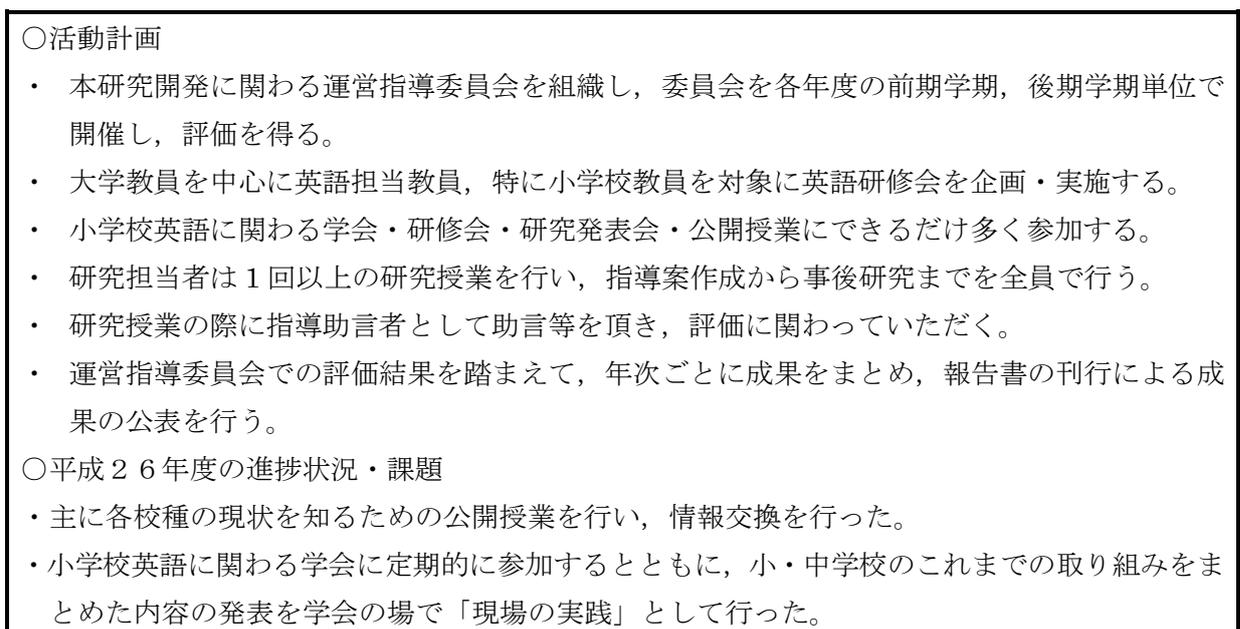
4. 研究組織

(1) 研究組織の概要 (平成26年度の進捗状況・課題)



(2) 運営指導委員会

活動計画 (平成26年度の進捗状況・課題)



- ・毎月1回の担当者会議で議論したことをもとに、後期学期において運営指導委員会を開催し、評価を得る予定である。
- 各校種における教育実習をはじめとする学校行事の共通理解が十分にできておらず、運営指導委員会を定期的実施することができていない。来年度以降、公開授業・事後検討会等の実践を踏まえた運営指導委員会を定期的実施していく必要がある。
- 今年度については各校種において教育内容の精査と教科目標・評価項目等の検討を中心に研究を進めた。そのため、本年度発行予定の刊行物については、各学校での取り組みを述べるにとどまり、学校間の接続などについて言及しきれていない。平成27年度以降については、小・中・高合同での研究発表会を行うと共に、各校種間の接続を意識した1年間の活動をまとめた刊行物（研究紀要等）を作成し、広く一般に公開し、外部からの評価を得られるようにする必要がある。

5. 年間事業経過

月	強化地域拠点の取組	運営指導委員会
4月	・小学校第3学年以上を対象に、児童英検（GOLD）を実施	
5月	・小中大英語担当者会議（英語教育研修会） ・文部科学省「『小・中・高等学校を通じた英語教育強化事業』に関する説明会」参加	
6月	・小中高大英語担当者会議 ・小学校公開授業事後研究会	
7月	・小学校公開授業事後研究会 ・文部科学省教科調査官視察（小・中）公開授業・事後研究会 ・他校研究発表会参加（奈良・近畿大学附属小学校）	
8月	・姉妹提携校交流学习（オーストラリア 南アデレード州ベレア小学校）および現地校スタッフとの外国語学習のあり方についての意見交換（小）	
9月	・小中高大英語担当者会議	
10月	・小中高大英語担当者会議 ・福井県勝山市教育委員会視察受入（小・高）公開授業・事後研究会 ・他校研究発表会参加（東京・明星学園小学校） ・近畿地区国立大学附属中学・高等学校英語部会（提案授業）取組発表（全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会 於：大阪教育大学附属高等学校池田校舎）	

11月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高大英語担当者会議 ・他校研究発表会参加（京都・光華小中高等学校） ・文部科学省視察（財務担当者）小学校公開授業・事後研究会 ・研究協力校（附属京都小中学校）研究発表会開催 公開授業・事後研究会 ・他校研究発表会参加（第64回全国英語教育研究大会） ・他校教育研究会参加（大阪教育大学附属高校天王寺学舎） ・他校教育研究会参加（筑波大学附属駒場中・高等学校） ・他校教育研究会参加（広島大学附属福山中・高等学校） 	
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高大英語担当者会議 ・他校研究発表会参加（岩手・岩手大学教育学部附属小学校）研究担当者・研究協力者全体担当者会議 ・教育研究フォーラム（小中一貫教育）開催（大学） 	
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高大英語担当者会議 ・小学校公開授業・事後研究会 ・中学校公開授業・事後研究会 ・小・中学校公開授業・事後研究会 	
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・小・中学校研究発表会 公開授業・事後研究会 ・高等学校研究発表会 公開授業・事後研究会 ・他校研究発表会参加 	運営委員会
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・小中高大英語担当者会議 ・1年目総括 	運営委員会
<p>【その他の取組】※あれば記入</p> <ul style="list-style-type: none"> ・11月 日本児童英語教育学会（JASTEC）関西支部第18回英語活動研究会において、小中連携を意識した小学校英語活動の取組についての報告を行った。 ・11月 2014年度京都外国語大学大学院公開講座にて、小中高接続を意識した中学校における英語授業の実践及び中学校英語教育の高度化についての報告を行った。 		

〈本事業担当連絡先〉

都道府県教育委員会等名	国立大学法人京都教育大学附属桃山小学校 担当（兒玉副校長）
連絡先（電話番号）	代表：075-611-0138（内線）なし 直通：075-611-0138
（電子メール）	E-mail：momosyo@kyokyo-u.ac.jp